

# 学問がくもんに生きる

丹下梅子たんげうめこ

今いまからおよそ百年まへ前、※とうほくていこくだいがくり東北帝国大学理科かだい大学がく（今の東北

大学理学部）に、はじめて女子が入学しました。しかも、化学がくを研究けんきゅうしようというのです。新聞しんぶんでも取り上げられ、多くおほ

の人がおどろきました。それが丹下梅子でした。

現在げんざいは、多くの女性じょせいたちが日本でも外国がいこくでも活かつやくしています。学問がくもんの世界せかいでもスポーツの世界でも、素晴すばらしい結果けっかを残のこしています。今ならそれはめずらしいことではありません

【丹下梅子】



（鹿児島県歴史資料センター黎明館）

※そのころ、帝国大学は、日本全国に七校しかなかった。

ん。しかし、梅子が生きた時代は、そうではありませんでした。 「女が学問をするなんて。」 という人が多かったのです。

そんな時代に、梅子はどのようにして学問を続けることができたのでしょうか。

一八七三年（明治六年）、鹿児島市の金生町のゆう福な家に生まれた梅子には、七人の兄弟がいました。特に、一つ上の姉のハナは勉強がよくできて、梅子の一番の仲良しでした。三さいの梅子が、手に持っていた竹のはしで自分の目をついてしまい、右目が見えなくなったとき、ハナは、

「梅子ちゃんの勉強は、わたしが一生けん命みて、いい学者

#### 【関連年表】

一八七三年 誕生

一八七六年

右目を失明する。

一八八六年

師範学校（現在の鹿児島大学 教育学部）入学

一九一四年

東北帝国大学理科大学入学

一九二一年

アメリカの大学へ留学

一九四〇年

農学博士号をもらう。

一九五五年

死去

にしてみせるから。」

と、お母<sup>かあ</sup>さんをなぐさめています。もともと梅子<sup>かき</sup>は、草<sup>くさ</sup>の葉<sup>は</sup>や木<sup>き</sup>の実<sup>み</sup>などから赤<sup>あか</sup>や青<sup>あお</sup>の色<sup>いろ</sup>をとり出<sup>い</sup>したり、小<sup>こ</sup>さい皿<sup>さら</sup>と細<sup>ほそ</sup>い棒<sup>ぼう</sup>などで天<sup>てん</sup>秤<sup>びん</sup>のよう<sup>よう</sup>なものを作<sup>つく</sup>ったりして遊<sup>あそ</sup>んでいる子<sup>こ</sup>どもでした。そして、勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>を始<sup>はじ</sup>めれば、おどろくほどよくおぼえる力<sup>ちから</sup>がありました。

そんな梅子<sup>かき</sup>は小<sup>しょう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>を卒<sup>そつ</sup>業<sup>ぎやう</sup>した後<sup>あと</sup>、特<sup>とく</sup>別<sup>べつ</sup>に十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>さいで試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>を受け<sup>うけ</sup>、一<sup>いっ</sup>番<sup>ばん</sup>の成<sup>せい</sup>績<sup>せき</sup>で師<sup>し</sup>範<sup>はん</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>に入<sup>い</sup>学<sup>がく</sup>しました。ところが、  
※寄<sup>き</sup>宿<sup>しゆく</sup>舎<sup>しゃ</sup>での生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>のさびしさから、友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>と夜<sup>よ</sup>おそくまでおしやべりをしてしまうなど、勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>が身<sup>み</sup>に入<sup>い</sup>らなくなりました。



※師<sup>し</sup>範<sup>はん</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>

先生<sup>せんせい</sup>になるための勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>をする学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>

※寄<sup>き</sup>宿<sup>しゆく</sup>舎<sup>しゃ</sup>

家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>から離<sup>はな</sup>れて、学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>が一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に暮<sup>く</sup>らすために、学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>がつくった建<sup>たて</sup>物<sup>もの</sup>

そして、試験が全くできず最低の点数をとってしまったのです。それがぐちゃしくて悲しくて、梅子は泣いて家に帰っていききました。そんな梅子に、ハナはこう言いました。

「梅子ちゃんはとても頭がいいけど、あきつぽいくせを直さないといけないわ。今日習ったことは必ず見直しをして、その次に明日習うことを勉強すること。この二つの決まりを一生けん命に守ることが、一番よい方法なのよ。」

この言葉で梅子は、勉強を続けることの大切さに気づきました。どんなときも、努力を続ける強い気持ちで自分の研究に一生けん命に向かう姿は、このときに生まれたのです。



【考えてみよう】

ハナから勉強の大切さを教えてもらったときの梅子の気持ちを考えてみよう。

師範学校を卒業してからも、もつと学問をしたいと願う梅子でしたが、お父さんの商売がうまくいかなくなり、家が貧しくなったことでそれが難しくなりました。そのため、十年ほど、先生として学校にも勤めました。しかし、梅子は学問への思いを強くもち続け、できたばかりの※女子大学校へ入学し、さらには日本で初めて三人の女子学生の一人として帝国大学へ入学したのです。四十一さいのときでした。初めのうちは、男子学生より後ろのはなれた席を用意されたり、悪口を言われたりすることもありました。しかし、地道に努力を続けてきた梅子は、成績も一番になりました。こうなる

---

※現在の日本女子大学

【考えてみよう】

梅子が学問の道に進むことができたのはどうしてだろうか。

と、だれもが梅子の努力を認めるようになりました。

その後、八年間アメリカへ留学して、研究を重ねました。

日本に帰ってからも、女子大学の先生として仕事をしながら毎日ビタミンなどの研究を続けました。そして、六十七歳のとき、農学博士になったのです。

今、梅子の銅像は、自分が生まれた場所に建てられています。その顔は、後に続く人たちをばげまし、見守っているかのようにです。



【丹下梅子銅像】



【丹下梅子誕生地】